

なでしこ通信 第 37 号

《隔月発行》

— 目 次 —

★男性原理の封じられた時代

大津寄 章三

★子宮頸がんワクチン—メディアの記事から

☆新刊のご紹介

白鵬著『相撲よ!』

工藤美代子著『悪名の棺 笹川良一伝』

☆事務局から

男性原理の封じられた時代 ■ □

幹事・中学校教員 大津寄 章三

先日、我が校で国語の研究授業を参観した。題材は「敦盛と直実」。いうまでもなく平家物語屈指の名場面である。

一ノ谷で敗北し、沖の軍船に乗り移ろうとした平氏の公達の一人に対し、源氏方の武将・熊谷次郎直実はこれを呼び止め正々堂々の勝負を迫る。逃げようと思えば逃げられたはずの敦盛はこの声にとって返し、両者は磯で組み討ちとなる。百戦錬磨の直実は初陣の若武者・敦盛をただちに組み敷き、その首を奪おうとした。しかし、兜の下の顔の幼さに驚いた直実は躊躇しその名を問うが、敦盛は「我が名知りたくばこの首にとって人に尋ねよ」と峻拒する。背後には味方も迫っており、逃がすこともかなわなくなった直実は泣く泣くその首を掻き切るのであるが、懐の名笛により、彼が昨夜平家の陣から流れてきた笛の主であったことを知るのである（戦前「青葉の笛」は国民周知の史実であった）。

さて、「なぜ敦盛は名乗らなかったか」という発問に対する生徒の感想を紹介する。

○ 日頃のストレスに耐えられず自殺しようと思っていたから

- 名乗ると狙われそうだから
- 自分が殺されて戦いを終わらせようとした
- 自分は有名だと思っていたのに知られてなかったの
- 直実に手柄を立てさせてやりたかったの
- どうせ逃げられないと思った
- 名乗ったら助けてくれるというのが信用できなかった
- 個人情報を知られたくなかったの…

無論生徒からは「命乞いは恥だから」「武士としてのプライドを守りたかった」等の答えもあるのだが、それにしてもこの反応はどうであろう（現代的価値観で歴史を振り返ることの陥穽は識者のつとに指摘するところであるが、教育における古典の扱いについてもその原則はもっと尊重されるべきであろう）。

ともあれ、生徒の反応に共通するのは「武」に対する理解の未熟さである。生命を至上価値とする戦後の“常識”は、生徒から「誇り」や「名誉」「品格」「美学」「廉恥」「怯懦」といった形而上的観念を奪い続けてきた。「死ねば元も子もない」「命あつての物種」という町人的発想は確かに豊かな暮らしや戦なき世に貢献したかもしれない。しかし、それだけに終始してはならない「非常時」の論理や原理、哲学があまりにも今の日本全体に欠如しているのではないか。そういう意味では尖閣諸島や北方領土をめぐる内閣の迷走もいじめられて死を選ぶ小学生の行動も根は同じである。争いや戦いはイコール悪であり、初手から選択肢より排除されるべきだとする発想は、「理不尽に対して言うべきは言う」ことは「戦争」につながり、「いじめと戦う」ことは「復讐」に直結するというおそれるべき誤解を孕んでいる（そのくせ部落差別に敢然と立ち向かった全国水平社は歴史の亀鑑とされている）。目先の争いを厭う姿勢こそが相手の軽侮と誹りを招く、というのは歴史の鉄則なのであるが、過去の反省とやらからこういった男性原理は「野蛮」「無知」「蒙昧」などとすこぶる評判が悪いようである。



子宮頸がんワクチン …メディアの記事から

昨年10月に厚生労働省が認可して以来、朝日新聞はいわゆる子宮頸がんワクチンを賛美し、中学入学頃の女兒への集団接種と公費助成の推進を強力に宣伝してきました。他の推

進力も合わさって、今年の5月頃から各地の自治体で公費助成による集団接種が始まり、現在実施した自治体数は300くらいになるそうです。9月に入ると、テレビやタウン情報誌なども加わって、「ワクチンで予防できる唯一のがんから女性を守ろう」一色になってしまったかのようでした。

6月30日の朝日新聞の座談会記事では、女優の仁科亜季子氏が「日本では子宮頸がんに関する情報がなかなか浸透せず検診率も低いため、若い女性で子宮頸がんが急増しています。昨年から、新たな予防手段として画期的な子宮頸がん予防ワクチンが日本でも受けられるようになりました」と述べ、鈴木光明教授（自治医科大学産科婦人科学講座）や梅村聡氏（参議院議員・内科医師）らと「子宮頸がんの新たな予防手段 ワクチンの公費負担と集団接種を全国に」「子宮頸がんは予防する時代です」という話し合いが行われています。

9月8日には「子宮頸がん—すべての女性に予防策を」と題する社説で、ワクチンができて子宮頸がんは「予防できるがん」になったとして、政府の集団接種へ助成する方針を歓迎するとともに、さらなる支援を求めています。

しかし、11月3日の科学医療グループの記者が書いた「記者有論」では、

- ・「ワクチンさえ打てば安心」という誤解も広がっているように思う。
- ・出来て間もない新しいワクチンの実力を正しく知ることが大事だ。
- ・ワクチンには限界があることははっきりしている。
- ・頸がん予防には検診も受け続けなければいけない。
- ・日本は検診率がきわだって低い。
- ・公費を投じるなら、何にどれだけ費やせば最善か、トータルな戦略を立ててほしいと思う。

と、ワクチンを接種しても検診をしないと子宮頸がんの予防はできないとし、公費を投じる対象として適当か疑問を呈しているのです。

ここで以下の事実を確認致したいと思います。数字に多少の違いがあっても、広く言われていることです。

- ヒトパピローマウイルス（HPV）は性交渉により8割の女性が感染する。
- 人体には免疫力があるので、子宮頸がんに至るのは1%足らず。
- HPVの種類は多く、このワクチンで予防できるのは50~70%。
- 年間約3500人が、最近は特に若い女性が、子宮頸がんて亡くなっている。
- 検診の受診率は、英国80%に対して日本の平均は20%。
- 特に20代の日本女性の検診は4%。

○ 子宮頸がんの低年齢化は、性交渉の開始年齢の低年齢化と無関係ではない。

さらに、群馬県教育委員会が実施した「性教育に関する調査研究事業」によりますと、「性行為はどんな人とするものとするか」は、家族との会話が深いほど「夫婦」「結婚する人」と、性行為に関する敷居が高く、「家族と話したくない」者は性行為の相手として「友達」「お金をくれる人」だったりします。朝食を毎朝食べる子供は家族との会話が深く、食べない子供ほど低年齢での性行為を認めています。朝食を家族と食べる者ほど、家族とよく話しており、よく話す者ほど親や自分のことが好きと答える割合が高く、今生きていることに対しても「うれしい」「ありがたい」と感じています。

厚生労働省は補正予算案に 150 億円を盛り込みました。ワクチンより検診、そして、家族力を強めるような施策にこそ予算が組まれるべきではないでしょうか。

新刊のご紹介

◎家族の強い強い絆を感じます◎

『相撲よ！』 第 69 代横綱・白鵬著 角川書店 1400 円＋税



日本には『箱入り娘』という言葉があるようだが、私の場合は立派な『箱入り息子』だったのだ。

（高一のとき）私の「日本に行く」という言葉に対する、父の決断は早かった。しかし、母は大反対だった。にもかかわらず母はそんなことはおくびにも出さず、日本へ出発する前夜、こう言ってくれた。

「まずは日本の水に慣れること。それから、モンゴルでは、〈人間の右肩には父親、左肩には母親、そして額には師匠の魂が宿る〉と言われているの。これは祖先からの言い伝えなの。ダヴァ（彼の愛称）もそれを忘れないように。皆さんが教えてくれることを大事にするんだよ。」

泣きたいことの連続だった。しかし、いま相撲をやめるわけにはいかないのだと思った。〈いまシンドイからと相撲をやめてモンゴルに帰ったら、お父さんに恥をかかせることになる、名前を汚すことになる。それだけは避けなければならない。だったらどうするか。頑張っ、我慢して、1つでも上位の力士たちと戦って強くなることだ。〉

『悪名の棺 笹川良一伝』 工藤美代子著 幻冬舎 1700円＋税

聞いていたテル（母）は正座しなおすと、笹川の目を見ながら言った。

「むごいことやの。私は全員の人が1日も早く釈放されるように、氏神様にお百度を踏むから、お前も今日から禁酒、禁煙を実行して、皆さんの釈放のために働きなさい。」

東京へ戻った笹川は、さっそく入獄者の支援、釈放のために活動を開始した。国内にとどまらず、マニラ郊外のモンテンルパ収容所などへも手を差し延べている。生前の笹川はこうした救援活動の仔細について自ら語ることは決してなかった。

モーターボート事業は順調に展開し始めたが、巣鴨に残されていた総員が出所する昭和33年までの10年間、笹川は酒とタバコを一切断ってきた。

テル自身も自分の古希の祝いなどで各方面から砂糖や汁粉などを贈られると、巣鴨プリズンの残留者たちにすべて差し入れていた。

さらに、地元の氏神様に休むことなくお百度参りを続け、1日も早い解放を祈願してきた。昭和33年1月にはまだ500人も残されていた。1月17日、「まだどれほど残っておられるのかの」と言いながら眠るようにみまかった。

■■■ 事務局から ■■■

◇◇◆ 子宮頸がんワクチンに関して連続3回取り上げました。安全性や有効性に疑問があることをご存じの方はまずおられず、「ワクチンで予防できる時代になったと思っていた」「一生効果があると思っていた」など肯定的な声ばかりです。周囲の大切な方に、ワクチン接種されないようにお渡しいただければと思い、今回は会報を2部ずつ入れさせていただきます。ご活用下さいませ。

◆◆◇ 『女ほどめでたきものは 又もなし 釈迦や達磨を ひよいひよいと産む』という狂歌を思い出しました。男女共同参画は《母性否定》《子供の視点ゼロ》です。松山市男女共同参画センターで研修を受けたときに、“抵抗”してこの歌をレポートに入れました。江戸中期の医師・太田見良の作で、彼は大洲藩に勤めていたそう。

◆◆◇ 11月22日の「いい夫婦の日」にちなみ、明治安田生命保険が20代～50代の既婚者に実施したアンケートによりますと、「理想の有名人夫婦」は5年連続で三浦友和さん

と山口百恵さん夫妻が1位でした。「夫が外で働き、妻は夫をしっかり支えているから」という意見が多かったそうです。

◆◆◆ 会費の切れる方に払込取扱票を同封しております。会費は1000円でございます。この機会にご家族や親しい方にもご入会いただければ幸いです。1000名を目指しております。現在755名でございます。

◆◆◆ 今年もありがとうございました。どうぞ佳いお年をお迎え下さいませ。ご尊家の益々のご繁栄とご家族の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

健全な男女共同参画社会をめざす会

会長 青井 美智子

〒790-0931 松山市西石井 1-3-30

ホームページ <http://www.mezasukai.com/> 電話 090-8971-7721 FAX 089-964-3903

メール michikoaoi25@yahoo.co.jp (件名を明記してください)